

“モノ探し行動” についての小考 —「ST ピラミッド型モデル」の提案—

佐々木 土師二

An approach to “looking-for-something” behavior:
Suggestion for a three-dimensional “pyramid-type” model.

Toshiji SASAKI

Abstract

“Looking-for-something” is a common type of search behavior. Two basic dimensions of this behavior are “search space (S)” and “search time (T)”, and a two-dimensional-space model consists of (S×T). Supposing that the progress of this search behavior is described as a continual reduction process of the (S×T) space, the entire search process is expressed by a three-dimensional “pyramid-type” model. If the behavior is stopped during the search process, this behavior is modeled as a trapezoid.

Keywords: looking-for-something, search space, search time, pyramid-type model.

抄 録

探し物をするを“モノ探し行動”と呼び、それが「探索区域 (Space) を狭くする」と「探索時間 (Time) を短くする」という二つの行動の組み合わせ (Space×Time) で成り立つため、基本的には4タイプの“モノ探し行動”に区分されるという発想を出発点としている。“モノ探し”の進行にともない“Space×Time”で構成されるST 2次元空間のサイズが次第に縮小し、その連続形として4角錐が描かれるというモデルを“ST ピラミッド型モデル”と命名した。また“モノ探し”の進行とともに、4タイプのうちで「的を絞った探し方 (探索区域が狭い×探索時間が短い)」が拡大してタイプ間均衡が変化し、4角錐が“いびつ”になっていく。“モノ探し”が完了する場合は尖塔のある「天守閣型」の4角錐であるが、中止された場合には4角錐の下部のみで形成される「天守台型」になる。

キーワード：さがしもの (探し物)、探索区域、探索時間、ピラミッド型モデル。

1. 「さがしもの」の日常化と若干の関連事項

「さがしもの」について考える理由

とくに高齢者の日常生活での経験的事象として、落としもの、忘れもの、なくし物 (無物) 等の頻発に伴い、それらを“探すこと”つまり「さがしもの」のための時間とエネルギーの投入がある種のストレスの原因として無視できなくなっている。高齢者では、“物忘れ”

の進行とともに「さがしもの」が日常茶飯事になっていると言ってもよいが、ただ、それらの経験が多くの高齢者にとって精神的健全さに対する自信を低下させているところもあるように思われる。

こうした落しもの、忘れもの等の原因は、当事者の資質だけでなく、種々の状況的・環境的な条件が関連していると推測され、その究明は精神医学、認知心理学、脳科学等の課題になるはずであるが、さまざまな形を示す「さがしもの」の広範囲にわたる複雑多岐な原因について説明することは、相当な難問であるように憶測される。

本稿では、そうした“原因”には近づかず、その“結果”として生じる「さがしもの」を行動論的に考えることによって、その特徴をいささかなりとも明らかにしたいと思う。

「さがしもの」の概念と「モノ探し行動」の意味

「さがしもの」は生活行動としての位置づけが明確になされているとは思わず、過去の生活行動分類や生活時間調査の項目としては取り上げられていない（佐々木, 2003）。わが国の最近の調査でも、NHK『2015年国民生活時間調査』や総務省統計局『平成28年社会生活基本調査報告』などが生活行動分類を体系的かつ詳細に行っているが、「さがしもの」は項目化されていない。（ただし、NHK調査の小分類28項目のなかの「その他」、総務省調査の小分類119項目のなかの「他に分類されない行動」に含められる可能性はないとは言えない。）

こうして、「さがしもの」の定義を明確に述べている調査文献等を見出すことができなかつたので、とりあえず、わが国の代表的な辞書における説明によって、その概念を理解したいと思う。ただし、この「さがしもの」という言葉があまりに日常的な用語であるためか、それらの辞書でも、同語反復的な説明にとどまっているのは止むを得ないところであろう。

まず『広辞苑』では、「さがしもの（捜し物、探し物）＝目的の物や紛失物などをさがしもとめること。また、その物。」とされており、これとほぼ同じ記述が『精選版 日本国語辞典』や『角川国語辞典』でも見られる。つまり「探す」という“行為”と“その対象物”の両方を意味しており、日常では使い分けられていることを示唆している。ただ、講談社『日本語大辞典』は「さがしもの（探し物、捜し物）＝見失ったものをさがすこと。」と、“行為”だけを指しており、“対象物”については触れていない。

そして、これらの辞書すべてで「ものさがし」という用語は採用されていない。しかし「さがしもの」の“対象物”でなくて“行動的側面”に注目するならば、「ものさがし」と

言うべきであって、『日本語大辞典』では、むしろ、そうするのが適切なのではないかと思われる。

その点から、本稿では「ものさがし」という言葉を意識しつつ、“対象物”ではなくて“行為”に焦点を当てるという目的から、あえて「モノ探し行動」と表現したい。

公的データにみる「モノ探し行動」

日本国民のモノ探し行動の頻度や投入時間の全貌について数量的データを示すことは不可能であろう。それは、モノ探し行動には、家庭内の居室や職場のデスクなどでみられる「小さなモノ探し」が圧倒的に多く、そうした「小さなモノ探し」までをデータ化することはできないからである。

そこで、氷山のごく一角だと言えるだろうが、警視庁『遺失物取扱状況』のデータは貴重である。そのインターネット発表（2018年3月9日更新）では、警視庁管内（東京都内）での平成29・28年における拾得届と遺失届の受理状況について次のデータを示している：

	[平成29年]		[平成28年]	
	拾得届	遺失届	拾得届	遺失届
件数（千件）……………	3,958	1,020	3,832	1,000
現金（百万円）……………	3,794	8,344	3,673	8,257
物品点数（千点）………	4,232	2,291	4,019	2,149

件数および物品点数では遺失届は拾得届よりもはるかに少ないが、現金（金額）では遺失届の方がはるかに多い。

そして「モノ探し」に関連する拾得物の処理状況（点数、平成29年）では主な物品について次のデータを示している：

	拾得届（百点）	遺失届（百点）	遺失者返還率（%）
証明書類……………	7,019	9,618	73.3
有価証券類……………	5,252	2,021	29.4
衣類履物類……………	4,841	505	3.8
財布類……………	3,583	3,874	64.5
かさ類……………	3,325	59	0.9
かばん類……………	1,675	952	31.2
携帯電話類……………	1,538	2,471	82.6
電気製品類……………	1,474	370	10.0
貴金属類……………	999	139	4.7
カメラ眼鏡類……………	915	161	5.2

ここで、遺失届と遺失者返還率は、遺失者がモノ探しを行ったということを部分的にでも表していると思われる項目であるが、遺失届が拾得届よりも多数なのが証明書類、財布類、携帯電話類である。これら3物品は返還率が特に高いものであり、遺失者のモノ探しが特に熱心であることを推測させる。(ちなみに、現金では、金額ベースの遺失者返還率は73.2%で、拾得者引渡し13.6%、都帰属12.9%である。)他方、返還率が特に低い物品は衣類履物類、かさ類、貴金属類、カメラ眼鏡類などである。

ただし、われわれがモノ探しを行う場合、一般的に、紛失の状況やその物品を警察に届け出することは稀である。このことは、どうしても探し出したいという気持ちを強く持つことは、特定の物品や現金を除けば、それほど多くないことを意味しているだろう。

そのことを表すデータが、内閣府政府広報室が平成28年10月に行った『遺失物に関する世論調査』(全国18歳以上の日本国籍を有する者3000人を対象とし、その60.1%に当たる1804人から有効回答を得た、調査員による個別面接聴取。)で報告されている。その調査では「傘、衣類、ハンカチなど、安価で大量に流通している物を落とした場合(“小さな落し物”と略記。)」と「運転免許証、財布など、値段が安くて大量に流通している以外の物を落とした場合(“大きな落し物”と略記。)」(筆者註：下線で示す「以外の物」より、「物以外」というほうがわかりやすい。)という2ケースについての対応を4項目で示し、複数回答を得ているが、その結果は次の通りである：

	小さな落し物	大きな落し物
警察署又は交番・駐在所などに問い合わせた遺失届を提出する……………	14.6%	91.1%
心当たりのあるお店、駅などがある場合、その施設に問い合わせる…………	50.4	70.6
警察がインターネット上で公表している落とし物の情報を閲覧する…………	3.1	9.6
特に探さないであきらめる……………	49.6	1.1

このデータは“小さな落し物”と“大きな落し物”との間で「警察署などに遺失届を提出する」や「探さないであきらめる」という対応に大きな差があることを明らかにしている。つまり、遺失届が遺失者から出されるのは、ほとんどが“大きな落し物”に限られているのである。“小さな落し物”の場合には、「心当たりの施設に問い合わせる」か「あきらめる」が多いので、日常的にはよくあることだが、モノ探しの公的統計データにはあまり表れないだろう。

ただ、このデータは「モノ探し行動」のなかで「探さないであきらめる」という選択肢が有力であることを示している。

2. “モノ探し行動” に関する図式モデル

“モノ探し行動” のモデル化

(1) “モノ探し” の基本的方法

われわれの日常的経験から“モノ探し行動”はきわめて多様であり、その手順や投入時間が探索場所や周辺状況などによって異なり、千差万別であることを実感している。ただ、われわれが“モノ探し”を行う時には、探す場所のあたりをつけ、その場所で何をしたかを思い起こそうとするだろう。また、そうした場所が具体的に浮かんでこない場合には、モノを失ったに至るまでの一連の足取りや行動を思い起こし、その時間的系列のなかで紛失の可能性の高い状況や場所を想定することもあるだろう。

つまり、この二つのケースが“モノ探し行動”の基本的方法であり、次の2タイプになる：

- ① 区域的方法……紛失した可能性の高い場所・経路などを想起し、その区域を集中的に探す。
- ② 継時的方法……紛失した可能性の高い状況を時間的順序に従って想起し、その順序で追跡する。

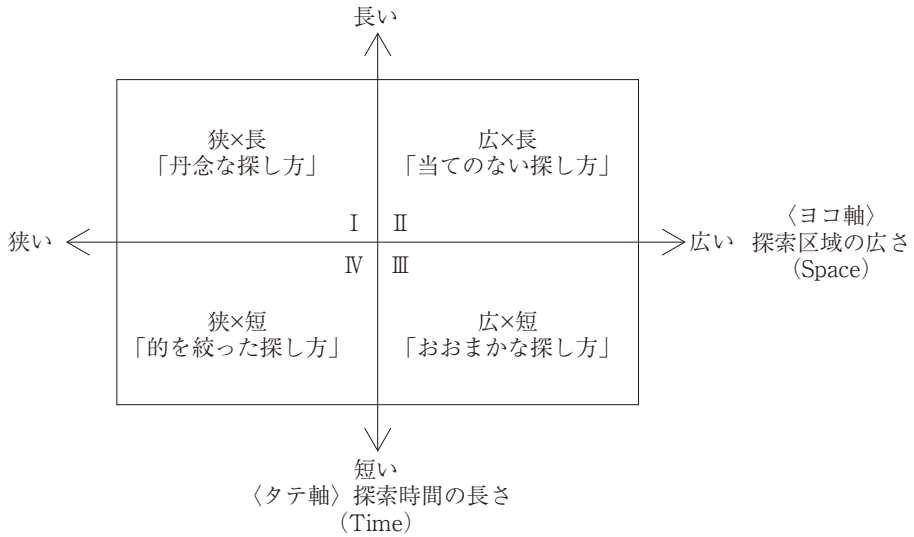
そして、この2タイプの方法は背反的關係にあるのではなく、一般に組み合わせさせて個別的な“モノ探し行動”になる。つまり、それぞれの方法の“程度”が基本になるわけだが、それらの“程度”を規定する代表的要素には ①探索区域の広さ、②探索時間の長さ、がある。そこで、この2要素を軸にして考えれば、典型的には、次の4タイプを設定できる：

	① 探索区域の広さ	② 探索時間の長さ	“モノ探し行動”の特徴（例示）
I	狭い	長い	「丹念な探し方」
II	広い	長い	「当てのない探し方」
III	広い	短い	「おおまかな探し方」
IV	狭い	短い	「的を絞った探し方」

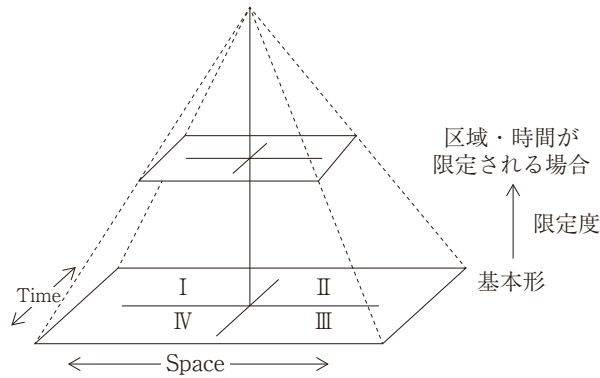
これは図式的に表せば、図Aに示す2次元空間モデルで描かれる。

(2) STピラミッド型モデルの構成

実際の“モノ探し”では、探索時間に制約があったり、場所やルートの絞り込みなど探索区域が限定できるなどして、継時的方法や区域的方法のとり方に規模・範囲の限定が生まれることが多い。それは、上記の図Aの2次元空間モデルのサイズの大小の違いで表現



図A “モノ探し行動”の4タイプ (ST 2次元空間モデル)



図B “モノ探し行動”に関するSTピラミッド型モデル

できる。そこで、図Aを基本として、区域・時間の限定度に応じた、サイズの異なる同形の2次元空間モデルを種々の段階で描くことができる。その状態を図式化すると、図Bのような“4角錐”つまり“ピラミッド型”で表される。

これら二つの図式は、基本的には空間的次元 (Space と略称。) と時間的次元 (Time と略称。) の組み合わせで構成されているので、各次元の英字略称のイニシャルである “S” と “T” をとりいれて、図Aは “ST 2次元空間モデル”、図Bは “ST ピラミッド型モデル” と称する。

ST ピラミッド型モデルの変形

(1) “モノ探し” の進行

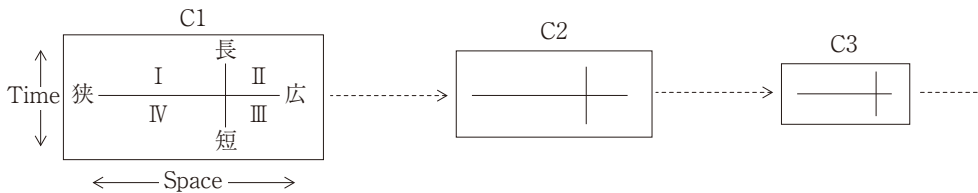
実際の“モノ探し”での具体的行動には、なんらかの“方針”がある。それは“モノ探し”を効率的に行いたいという、顕在的あるいは潜在的な動機にもとづいている。その際の“戦術”は、次の二つの行動を基本としている：

- ① 探索区域（Space）を狭くする。
- ② 探索時間（Time）を短くする。

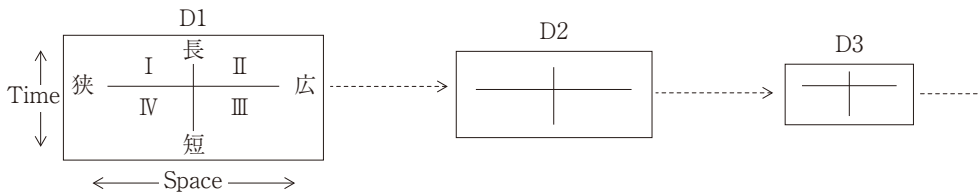
そして、多くの場合、まず①が選択され、次に②が選択されて、“モノ探し”が進められるだろう。

この進行プロセスをSTピラミッド型モデルに表すために、まず①「探索区域を狭くする」場合を考えると、図AのST 2次元空間モデルの“Space”の「広い」部分の縮減として把握される。つまり、象限Ⅱ、Ⅲの縮小と象限Ⅰ、Ⅳの拡大が進む変化として表され、さらに、空間全体が小さくなっていくという図式になる。この様相の三つの段階を示したのが図Cである。

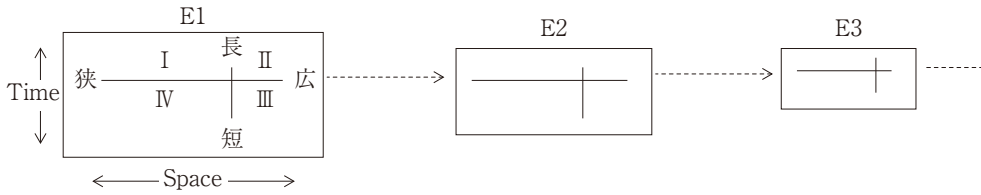
次に、②「探索時間を短くする」場合を考えると、図AのST 2次元空間モデルの“Time”の「長い」部分の縮減として把握される。つまり、象限Ⅰ、Ⅱの縮減と象限Ⅲ、Ⅳの拡大が生じたうえ、空間全体が小さくなっていく。この様相を三つの段階で示したのが、図Dである。



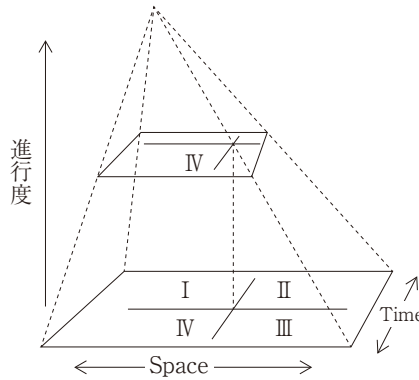
図C “モノ探し” の進行に伴う探索区域の縮小



図D “モノ探し” の進行に伴う探索時間の短縮



図E “モノ探し”の進行に伴う探索区域と探索時間の変化



図F “モノ探し”の進行に伴うSTピラミッド型の歪み

そして、実際の“モノ探し行動”は上記の二つの変化が組み合わさって（“Space×Time”）進行するものと考えられる。その様相は図Eのように描くことができる。つまり、象限IV [的を絞った探し方]が拡大し、他の3象限は縮小していくのである。

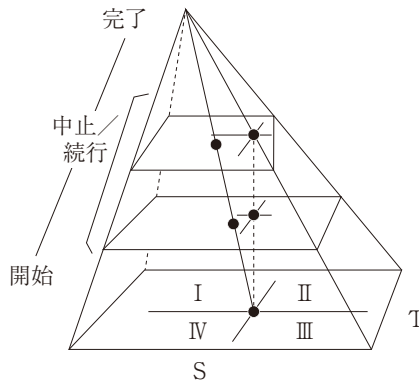
(2) STピラミッド型モデルの歪み

“モノ探し”が進行すると、上記のE1→E2→E3……という変化が連続すると考えられ、その変化を含みながらSTピラミッド型が成り立つことになる。それは、象限IVが拡大し象限IIが縮小するプロセスであって、そこで成り立つ4角錐は、Space軸とTime軸の交点が垂直に立つものとするれば、象限IVの方向に傾いたものになり、モデルは“正4角錐”でなくなる。それを示すのが図Fである。

モノ探しの“完了”と“中止”

(1) STピラミッド型モデルに示す“モノ探し”プロセス

“モノ探し”では、探しモノを“探し当てる”ことで「完了」する場合と、その進行途上



図G STピラミッド型モデルで示す“モノ探し”プロセスの諸様相

でなんらかの理由で「中止」する場合がある。「中止」には「あきらめる」のほかに「探索時間がなくなる」「探索区域に近づけなくなる」など種々の理由があろう。その“モノ探し”の開始／中止／続行／完了のプロセスの諸様相をSTピラミッド型モデルのなかに示したのが図Gである。“モノ探し”の進行とともに象限Ⅳが拡大していくため、“ST 2次元空間の中心”と“Space軸 x Time軸の交点”との乖離が相対的に大きくなり、STピラミッドの頂上は象限Ⅳの方向に傾くように“いびつ”になる。

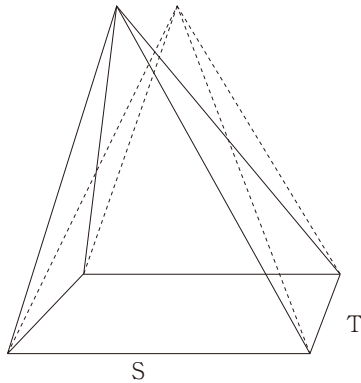
(2) 「天守閣」型と「天守台」型

つまり“もの探し”が「完了」した場合は 図Hのように“いびつ”な形の4角錐で表すことができる。他方、「中止」や「続行」の場合は、図Iのように4角錐の上部が形成されていない台形として表される。（「探索時間」や「探索区域」が残されていることを示している。）

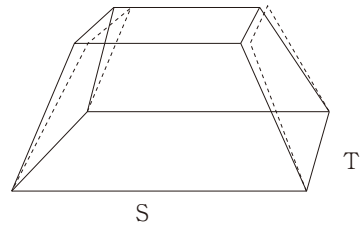
これを、日本の城の形状になぞらえれば、図Hは頂上までの建造物がある「天守閣」型（たとえば彦根城）、図Iは下部の石垣だけが残されている「天守台」型（たとえば郡山城）とみることができる。

ピラミッド型と天守閣型

ピラミッドと天守閣の形状はかなり違っている。「ピラミッド」は正4角錐であって上部は下部に比べて内部空間のサイズが小さくなり、その4面はすべて3角形から成っている。この形状で表された“モノ探し”の進行状態は、その2次元空間の各段階でその直前段階よりも“モノ探し”の規模が小さくなっていて、“モノ探し行動”が順調かつ一方向的に



図H “モノ探し”の「完了」を表す「天守閣型」(実線で示す)



図I “モノ探し”の「中止」「続行」を表す「天守台型」(実線で示す)

“前進”している様子を伺わせる。他方、「天守閣」は、屋根部分と部屋部分が交互に組み立てられて建っており、その外形は凹凸の繰り返しで、正面（彦根城でいえば「本丸御殿跡側」）の形状から推測すると、“モノ探し行動”の2次元空間が拡大と縮小を繰り返している様子を見せている。

ところで、実際の“モノ探し”では、“探索区域の縮小”と“探索時間の短縮”が順調かつ一方向的に進むとは限らない。以前に一度は探したことのある区域を見直したり、再度長い時間をかけて“やり直す”ということもよく起こる。この場合は、直前段階よりもサイズの大きい2次元空間が生起していることを意味している。その形状を“モノ探し”の進行過程の図式で表せば、不規則な凸部が途中で生じることであり、それは天守閣型でいえば、屋根部分に当るものである。

こう見ると、実際場面を反映するのは“ピラミッド型”よりも“天守閣型”だと言えそうである。

この図式モデルで“モノ探し行動”を考える意味

図式モデルといっても、それがシンプルな形で描かれるとは限らない。筆者もかつて「観光旅行者行動」に関して、多段階的で多要因から成るかなり複雑な図式モデルを描いたことがある（佐々木,2000. p.379；佐々木,2007. p.223.）。その場合は、大量に発表・報告されている知見やデータをできるだけ網羅した体系を示すためであった。しかし他方では、豊富にある知見やデータをシンプルな体系に納めるために2次元空間モデルを作成したこともある（佐々木,1984；佐々木,1988）。

図式モデルの描き方は、当該領域での知見の量と質に依存しているだけでなく、その目的によっていろいろだと言えるだろう。

図式モデルは、その構成者の問題意識と着眼点を、抽象的な表現ではあっても、明確に示すために作られるものである。しかし、それがシンプルであるほど、構成者の意図とは違う展開を生み出す自由度は高く、新しい着眼や課題設定を生み出すのにつながるが多いただろう。一方で、そうしたシンプルなモデルでは、その限界や適用範囲を認識することが必要である。それは、そのモデルは、モデルを構成する要因、それらに付与する特性、要因間や特性間の関連づけ、モデルの適用可能範囲、などで限定的だからである。

こうした点から、本項での“モノ探し行動”の図式モデルの提示は、知見やデータが乏しいなかでこの問題への取り組みの出発点における考え方を要約的に描いたものである。そのモデルの妥当性や説明力についての評価は今後の研究成果に委ねられる。ただ、初歩的レベルにあるところから、その行動についての検討や研究のための素材にどこまでなり得るかという問題はあがあるが、その展開への開放度は高いと言えるだろう。

3. “モノ探し行動” を考察するために

STピラミッド型モデルの特長と限界

本稿では“モノ探し行動”に関する図式モデルとしてSTピラミッド型モデルを提案したが、それは「探索区域を狭くする」と「探索時間を短くする」という2側面を同時進行させる行動として把握したものである。そして、その多様な姿を単純化し抽象的に描いているので、それは“モノ探し”だけの様相をモデル化していると限ることはない。より広く、なんらかの程度の“探索意図”がある行為をある種の区域内で行う場合には適用され得るものである。たとえば、通勤・通学のための効率的なルートを見出していく場合や、あらたに住むことになった地域で店舗その他の施設のありかを学習していく場合など、認知地図を形成していくプロセスを描写するのに応用できるだろう。また、1日分あるいは数日分の新聞紙のなかから必要記事をスクラップする場合や、辞書内で相互に関連する項目を探し出す場合など、検索行為のモデルとしても利用できそうである。

こうした“汎用性”が期待される半面、それらの行為の実質性についてどれほどの説明力がそなわっているかという問題も指摘できるだろう。これは、玩具のプラモデルがそうであるように、モデルというものの必然的性質つまり「宿命」ではあるが、“基本モデル”を内実化する“副次モデル”をどれほど必要とするかという問題でもある。たとえば、さ

きに引用した内閣府政府広報室の『遺失物に関する世論調査』における“小さな落し物”と“大きな落し物”との間の“モノ探し行動”の違いには、STピラミッド型モデルのうえでの違いを越えて、遺失者にとっての落し物の“重要度”いわば“心理的関与度”が大きいかかわってくるが、それは“モノ探し行動”の多様性に関連する側面として、なんらかの補足的説明か副次モデルを必要とすることになる。

このことは、図AのST2次元空間で表した4タイプの“探し方”の命名についても言えることである。それらは、おおまかな特徴を例示しているだけである。そこで、たとえば象限IVを「的を絞った探し方」と呼んでいるが、その“狭×短”の性質に「やる気のない探し方」の特徴を見ることだってできないわけではない。さらに“探し方”の具体性については、多くの問題を含んでいる。たとえば図書館の書架で本を探すような場合、並べられている図書の書名を一つずつ見ていく方法もあれば、飛び飛びに見ていく方法もある。(この状況は、後者は蛙が地面をピョンピョンと飛んで“点から点へ”移動する姿を連想させるので“蛙飛び式”と、また前者は同じ蛙が水中では連続的な線を描くように移動するので“蛙泳ぎ式”と、それぞれ俗称することができよう。)このように各象限の“探し方”について、その描写や説明をどこまで具体的かつ的確に行うかが、今後の派生的あるいは発展的問題として生じる。

“モノ探し行動”の心理的側面

本稿で示す図式モデルは“モノ探し行動”の行為面に焦点を当て、心理面には触れていない。関連するところがあるとすれば、「探索区域を狭めたい」「探索時間を短くしたい」という意図が潜在的な動機になっている点である。この点は、少なくとも外見的には“迷路学習”に似ているように思う。認知機能では「見通し」あるいは「期待」による方向づけが基本になるだろうし、動機面では「コスト・ベネフィット（費用対効果）」の問題があり、「ベネフィット」では消極的な意味（例えば「損失したくない」「イライラを解消したい」というような。）が強いが、「コスト」では時間・金銭・心身エネルギーなどの負担がある。また“問題解決”の側面があるので、そのプロセスや方略に関心を寄せることができる。

さらに、“モノ探し”の途上や終息段階での情動や気分も取り上げることできる。“落し物”の拾得者に対するお礼が問題になれば、社会心理学的テーマにもなりうる。

こうした心理的側面をどのように扱うかは、本稿で示した図式モデルの範囲をはるかに越えているが、“モノ探し行動”を幅広く取り扱おうとすれば、視野に入れなければならない事柄である。

“モノ探し行動”を考える意義

日常生活で“モノ探し”はわれわれの誰もが経験することで、あまりにも“ありふれている”という感じさえする。そして、“些細な行為”であり、また“後ろ向きの行為”といえることができるかも知れない。しかし、そうした理由で“モノ探し”を研究的課題から除くことはできない。人間の精神的活動や行為はどんなものでも「心理学的」課題になりうると考えるべきであろう。

“モノ探し行動”が認知心理学的課題であることは間違いない。それは「記憶をよみがえらせつつ課題解決をする」という行動である。その実行では、いくつかの行為の選択肢のなかで「探し当てる」可能性が高い行為を選択し、それで成功しない場合には次の選択肢に期待したり「中止」を決定するという、一連の活動が見られるだろう。合理的な洞察で方向づけられることもあれば、試行錯誤を繰り返すこともある。その間の記憶・思考・学習・意思決定等の過程は面白い研究テーマになるに違いない。

また、その課題解決には責任感や焦躁感、あるいは達成感や失望感を伴っていることも多い。他人を巻き込んだ協同作業になることもある。ただ、それは“結末（解決や中止の形）”が比較的明瞭であるといえるだろう。

このように心理学的研究課題として“モノ探し行動”を見るのではなく、ありふれた生活行動と考えて“生活技術”としてとらえる視点も欠かせないだろう。本稿で述べた範囲では、区域的方法と継時的的方法ということになるが、その一方に過大に偏らないことが大切なのではないかと思われる。経験的には継時的的方法をとることは少ないようだが、この方法が効果的であることも稀ではないと感じている。こうした点についての客観的データを得るためにも、STピラミッド型モデルは示唆を与えるのではないかと考えている。

4. 本稿のまとめ

本稿は“モノ探し行動”に関する初歩的考察にとどまっている。

その行動の基本的な性質を空間的側面と時間的側面というごく一般的な概念でとらえ、それを単純な2次元空間で特徴づけ、さらに、その変化の様相を3次元の4角錐で描写している。

しかし、実際の“モノ探し行動”には多様な要因が関連し、さまざまな実行形態があるので、本稿で示した図式モデルでは実際的な説明力を持ちえないことは明らかである。その具体性は、このモデルの発展あるいは延長によって付与できるのか、あるいは、別の論

理にもとづく説明が必要になるのかは、今後検討しなければならない問題である。また、認知や動機などの“心理的側面”との関連についても検討する必要がある。それは、一つの“総合モデル”の構築に向かうか否かという問題につながることもある。

参考文献

- 警視庁 (2018)『遺失物取扱状況』(インターネット発表による.)
内閣府政府広報室 (2016)『“遺失物に関する世論調査”の概要』(インターネット発表による.)
NHK放送文化研究所 (2016)『2015年国民生活時間調査報告書』(インターネット発表による.)
佐々木土師二 (1984)衣生活における消費者行動. 繊維製品消費科学, 第15巻第11号. 69-72.
佐々木土師二 (1988)多品種少量化と消費者行動の変化. マーケティング・ジャーナル (日本マーケティング協会), 第8巻第2号. 8-16.
佐々木土師二 (2000)『旅行者行動の心理学』関西大学出版部.
佐々木土師二 (2003)時間使用調査における生活行動の分類:「時間消費の心理学」に向けて (3).
関西大学社会学部紀要, 第34巻第3号. 205-257.
佐々木土師二 (2007)『観光旅行の心理学』北大路書房.
総務省統計局 (2016)『平成28年社会生活基本調査報告 (調査票Bに基づく結果)』(インターネット発表による.)

(付記) その他『広辞苑』『精選版 日本国語辞典』『角川国語辞典』『日本語大辞典』などを参照した。

—2018.5.21受稿—